

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 21 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：21720013

研究課題名(和文) 苦しみと身体についての倫理学的研究

研究課題名(英文) ethics of suffering and corporeality

研究代表者

中 真生 (NAKA, Mao)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：00401159

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：「苦しみ」、「身体」、「他者」、「性」を基幹のテーマとする本研究は、とくにそれらの交差する、「生殖」、「性差」、「女性的なもの」というより具体的なテーマに焦点を当て、一方で、レヴィナス思想研究においてこれらのテーマの重要性を明らかにするとともに、他方で、フェミニスト思想を参照しつつ、生殖を他なるものと性差、苦しみの観点から考察し、さらには生殖技術の現状や問題点を具体的に把握した上で、当技術の意味や影響などを哲学・倫理的にどのようにとらえられるかについても考察した。

研究成果の概要(英文)： While this research is at base motivated by "suffering", "corporeality", "the Other" and "gender", during this period, we have especially focused on more concrete themes deeply related to them such as "reproduction", "sexual differences" and "the feminine". On the one hand, we carried out the research on these themes using the philosophy of Levinas. On the other hand, we examined reproduction from the perspectives of the Other, sexual differences and suffering while referring to the feminist thoughts. Moreover, we considered philosophically and ethically the significance or influences of advancement of reproductive technology in taking its current situations and problems into consideration.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：他なるもの 生殖

1. 研究開始当初の背景

本研究は、18-20年度の若手研究(B)に採択された、「悪と苦しみの倫理学」と題する研究を大枠で引き継ぐものであった。もともと「悪と苦しみの倫理学」は、少なくとも10年以上費やして探求することを見込んだ、比較的規模の大きな研究構想であり、本研究もその一部を成している。倫理学においては、善や正義、愛など、あるべき姿、積極的な側面を考察の中心におくことが多いが、本研究構想は、いわばそうした光に対する陰の部分、人間存在の負のあり方に敢えて焦点を合わせ、それを一貫して考察し、明らかにしようとするものであった。その負の側面に、報告者はとくに、悪と痛みという主題から切り込み、分け入ろうと考えた。

前研究課題、「悪と苦しみの倫理学」において、報告者はとくにレヴィナス思想を悪と痛みという観点から研究し、まとめることを目的として掲げたが、その成果は2007年に提出した博士論文、「レヴィナスの主体における他なるものとの関係 超過と身体」へと結実した。そこでは、レヴィナス思想において、必ずしも痛みという語を用いるとは限らないものの、痛みは一貫して、つねに彼の思想を支えているものであることを明らかにした。また、悪の問題は、法や正義、道徳法則等と関連させて、悪を被る個々の人間からある程度距離をとって、客観的に論じられることが多いが、レヴィナスはこれに抗して、悪を、徹底してそれを被る者に寄り沿って、身体に被る痛みとして考察していることを示した。そこで本研究は、レヴィナス研究を中心に得られたこれらの成果を継承し、それを土台としながらも、「痛みと身体」を軸に、「他者」や「性」という観点から、他の現象学やフェミニスト思想にも踏み込んだ文献研究を展開するとともに、この同じテーマを、「生殖」を中心に据え、現実に即した応用倫理学的研究によっても同時に

探求することを計画するに至った。

2. 研究の目的

人間存在の負の側面を考察する際に、報告者がつねに考察の軸とし、土台とするのが「身体」である。「身体」を軸として考察することは、人間存在の負の側面をつねに、それを被っている個々の人間に沿って、しかも個々の差異を捨象することなく、ありのままに浮かび上がらせることである。そこで本研究では、研究構想全体のうち、とくにこの「身体」に関する理論的研究と応用倫理学的研究を重点的に進め、深めることを主眼とした。このため本研究は、「痛みと身体についての倫理学的研究」と名づけられた。負の側面を身体の視点から見るとき、それは何より身体に被る傷や病であり、その延長にありうる死である。しかしそれにとどまらず、広くとらえれば、いわゆる「精神的」痛みと分類されがちな苦悩や、孤独、さらに他人との関係のなかでわが身に受ける不利益や「傷」もまた、個々の身体的存在が被る悪であり痛みであるといえる。こうしたさまざまな痛みに対して、哲学・倫理学を中心としたテキスト解釈による理論的研究とともに、医療や福祉の現場に目を向けた、応用倫理学的研究によっても接近することが、本研究のみならず、報告者の研究構想全体を貫く方針であった。

後者については、一方で、ケア論や生命・医療倫理、性・性差の倫理を、痛みと身体の観点から研究するとともに、他方で、とくに「生殖技術」に焦点を絞り、現場や当事者の状況や各国の現況を踏まえた上での具体的な考察も含んでいる。生殖技術は、ここ数十年で急速に発展した技術であり、議論もこれからより高まり、洗練されていくものと見られる。ただ、こうした生命倫理の諸問題は、法律や医療技術に焦点を当てて、渦中の諸個人から距離をとって客観的に考察されることが多いが、報告者は生殖医療のただなかで

苦しむ、主に女性の立場に寄り沿って考察したいと考えた。これは、レヴィナスが悪を、それを被る者の苦しみに沿って考察した姿勢にも適うものである。「苦しみと身体」という本研究の性質上、現実の苦しみを具体的に把握し、それに基づいて考察することは必然的に要請されていると言える。また生殖技術における苦しみは、生と死のみならず、性、ジェンダー、家族観にも深く関わるテーマであり、応用倫理や倫理学においていまだ十分に論じられているとは言えないこれらの問題に、苦しみと身体という一貫した問題意識から迫ることを目指した。

3. 研究の方法

2007年に提出した博士論文、「レヴィナスの主体における他なるものとの関係について 超過と身体」は、応募者の研究構想の一部を成し、本研究の土台となるものであった。それは、レヴィナス思想を一貫して苦しみと悪の観点から読み直し、これまでそれほど重視されなかった、身体に関わる性質を浮き彫りにするという画期的な試みを実現したのだが、そうした性質上、どうしてもレヴィナス思想に内在的な考察が中心とならざるをえなかった。そこで本研究では、まず、苦しみや身体という観点から浮き彫りになったレヴィナスの思考の独自性を、レヴィナス思想に内在的に説明するにとどまらず、他の現象学的研究との関連の中において考察する研究を行った。その試みは、それ以降、苦しみと身体という主題を軸として、レヴィナス思想の枠を越えて、フェミニスト思想を含む、さまざまな思想を横断的に検討する研究の基礎となった。他にも、2011年の京都ユダヤ思想学会におけるシンポジウムでの提題、論文執筆を機会に、博士論文では「被造性」との関係で部分的に考察するにとどまった、レヴィナスにおけるユダヤ的思想に関して、身体と性差の観点からより踏み込んで考

察することができた。

一方で、応用倫理学的研究においては、まず生殖技術に関する文献研究と現況把握に取りかかり、生殖技術に関する具体的考察を含む提題を、2012年の哲学会ワークショップで行った。また翌年には、生殖技術のうち、とくに「出生前診断」について、より具体的なデータに基づいた研究を行い、東アジア応用哲学・応用倫理学国際会議にて発表した。さらには、より具体的に現場や当事者と関わる方法を模索して、社会学や人類学、また現象学における質的調査法的方法的研究も行った。

4. 研究成果

(1) 主な成果

本研究課題の成果は、大きく分けて次の3つに分類できる。

レヴィナス研究

報告者が博士論文に至るまで研究の中心においてきたレヴィナス思想を、「生殖」、「女性的なもの」、「(主体における)性差」ととくに焦点を当て、レヴィナスの主張とその意義について再検討した。この研究はこれまで重点を置かれてこなかったテーマについて熟考しその重要性を提示するとともに、それらについてのフェミニスト思想との相違だけでなく近親性を明らかにした。この研究は以下の研究の理論的基盤を提供する意義もある。この具体的な成果は、次の論文、「レヴィナスにおける『女性的なもの』とエコノミー」や、「レヴィナスの思想における『女性的なもの』について - 性差と主体のうちの二元性」にまとめられた。

「生殖」を中心とするテーマ研究

哲学者のテキスト研究に基盤をおくのではなく、「生殖」、「他者」、「女性的なもの」、「性差」、「身体」、「苦しみ」といったテーマを出発点におきつつ、主にレヴィナスを中心とする現象学やフェミニスト思想のアイデ

ィアを延長しつつ、生殖等の現状や具体例に即した哲学的・倫理的考察を行った。この研究の成果は主に、論文「生殖と他なるもの」¹⁾、”**The otherness of reproduction: our passivity and control of it**”にまとめられた。

「生殖技術」を中心とする応用倫理学的研究

生殖技術に関して、日本を含めた各国の現況分析に基づき、個別領域に踏み込んだ研究を行った。この研究は の研究の現実的かつ個別的な考察の足掛かりを与えることができた。この研究は主に、前掲論文「生殖と他なるもの」の後半部にまとめられた。さらに、生殖技術のうち、とくに「出生前診断」に焦点を絞り、それについての現況分析を踏まえた上で、それを「他なるもの」の観点から具体的に考察した。この成果は主にプロシーディングス、” **On the control of reproduction: prenatal diagnoses in reproduction technology**”にまとめられた。

(2) 研究成果の国内外における位置づけとインパクト

国内

最近、日本でもフェミニスト現象学や、フェミニスト倫理学への関心が高まりつつあり、本研究が焦点を当てている「生殖」や「身体」、「性差」の問題はその中心主題のひとつである。他方で、生殖技術の領域では、「出生前診断」を中心に倫理的関心や議論の必要性が高まっている。そうした中、この両領域にそれぞれ踏み込んだ研究を行いつつ、同時にそれらを分けることなく連続的に一貫した観点のもと哲学的に論じ、哲学会ワークショップで提題するとともに、「生殖と他なるもの」という論文として公表したこと、またこれを皮切りにさらに研究を進めている点に意義がある。

国外

日本の生殖技術の現状や倫理的問題を踏まえつつ、それを哲学・倫理的に考察し、第5回東アジア応用哲学・応用倫理学国際会議で発表した。また北欧現象学会では、レヴィナスやフェミニスト思想を援用しながら、生み、生まれるものとしての人間主体について、生殖技術の現状に触れつつも、前者の発表よりもより哲学的に踏み込んで論じた講演が好評を得て、『妊娠の現象学』という本に収録され公刊されることとなった。生殖や生殖技術をめぐる問題は、基本的なところでは世界共通でありながら、各国の対応や受け入れ方、葛藤や議論のあり方には少なくない相違がある。一方で日本や各国の差異に焦点をあてながらも、他方で生殖にかかわる人間の普遍的なあり方を探る研究を海外に発信し、また反応を得ることは、諸外国にとっても、日本にとっても有意義である。

(3) 今後の展望

本研究を通じて報告者の一貫した研究関心が、「他者 身体 性」という三主題の交差する領域にあることがより鮮明に自覚されるようになった。本研究が重点を置いた生殖はまさにその中心に位置したわけだが、今後は引き続き生殖の観点から、この三主題の交わる領域をより深く浮き彫りにするとともに、生殖の主題にとどまることなく、ケアや性的関係といった同じ領域に属する異なる観点からも探求していきたい。また、これまで思想的基盤としてはレヴィナス思想といくつかのフェミニスト思想が中心であった。今後は、生殖、身体、他者というテーマに深くかわり、一部のフェミニスト現象学の土台にもなっているメルロ＝ポンティの思想を、報告者の観点からより掘り下げて研究するとともに、フェミニスト思想、ジェンダー思想にもより深く踏み込んで研究し、理論的な考察の可能性を広げたい。同時に、応

用倫理的観点からは、生殖技術やその他、性差や身体性に関わる事柄の、正確で細かな差異を含んだ現状を把握し、事例に沿って具体的に考察できるようにインタビューや観察を積極的に盛り込んでいきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

1. 「レヴィナスの思想における『女性的なもの』について - 性差と主体のうちの二元性」, 中 真生、京都ユダヤ思想、レヴィナス特集号、2014年(刊行予定)、査読有

2. 「生殖と他なるもの」, 中 真生、神戸大学文学部紀要第41号、2014年、19-52頁、査読有

3. “On the control of reproduction : prenatal diagnosis in the reproduction technology”, NAKA Mao, in *Proceedings of the 4th International Conference : Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia*, vol.4, 2014, p.138-147、査読無

4. 「初期レヴィナスにおける『女性的なもの』と『存在のエコノミー』」, 中 真生、科研費報告書(基盤研究(B))「エコノミー概念の倫理思想史的研究」、麻生博之代表、2010年、93-108頁、査読無

[学会発表](計4件)

1. “The Otherness of Reproduction: our passivity and control of it”, NAKA Mao, The Nordic Society for Phenomenology, 25th April, 2014, University of Helsinki.

2. “On the control of reproduction : prenatal diagnosis in the reproduction technology”, NAKA Mao, The 4th International Conference : Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia, 7th April, 2013, Kobe University.

3. 「生殖と他なるもの」, 中 真生、哲学会ワークショップ、2012年11月3日、東京大

学

4. 「レヴィナスの思想における『女性的なもの』について - 性差と主体のうちの二元性」, 中 真生、京都ユダヤ思想学会、2011年12月18日、京都大学

[図書](計2件)

1. *Phenomenology of pregnancy*, 2014(刊行予定)(共著)

2. 『哲学への誘い』第二巻(第2章「問いつめる」担当)、松永澄夫・村瀬鋼編著、東信堂、2010年、41-72頁(共著)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中 真生 (NAKA, Mao)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：00401159

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：